



図1 佐藤庄司が旧跡 徳川本

図2 佐藤庄司が旧跡 海杜本



図3 等裁 徳川本

図4 等裁 海杜本

〔作品紹介〕

新出の与謝蕪村筆「奥の細道図巻」模本について

加藤 祥 平

緒 言

一 作品概要

二 諸本との比較検討——海杜本を中心に——

(一) 本文の異同

(二) 書体

(三) 挿絵

結 語——「奥の細道図」の中で——

〔資料〕本文対照表

緒 言

平成二十五年(二〇二三)、与謝蕪村筆「奥の細道図巻」模本(以下、「徳川本」と略称する)が坂田宏・太田美和子両氏より新たに当館に寄贈された。⁽¹⁾ 蕪村による「奥の細道図」に関連する興味深い資料であることから、ここに紹介する。

新出の与謝蕪村筆「奥の細道図巻」模本について

与謝蕪村(一七一六～八三)による「奥の細道図」は、松尾芭蕉(一六四四～九四)の著した『奥の細道』の本文を蕪村が書写し、自身で創作した挿絵を部分的に加え、巻物・屏風の形態で製作した作品群である。『奥の細道』は、云うまでもなく松尾芭蕉による紀行文の傑作で、旅自体は元禄二年(一六八九)に決行されたのち、同七年に成稿し、同十五年には京都の書肆・井筒屋から出版された。

蕪村の芸術活動が最盛期を迎えた安永年間(一七七二～八一)頃は、蕪村周辺で蕉風復興運動が高まりを見せた時期であった。安永五年四月には、樋口道立を發起人として比叡山麓一乗寺村の金福寺に芭蕉庵が再興され、同八年十月には同寺に芭蕉翁像が奉納された。更に天明元年(一七八一)五月十八日には蕪村が『芭蕉庵再興記』を記し同寺に納め、翌年十月十二日には同寺芭蕉庵にて芭蕉忌が催された。

こうした蕉風復興運動の高まりの中、安永六年から同九年にかけて製作されたのが「奥の細道図」である。⁽²⁾ 本稿では、これまで確認されてきた「奥の細道図」諸本との比較検討をすることにより、新出の徳川本の位置付けを

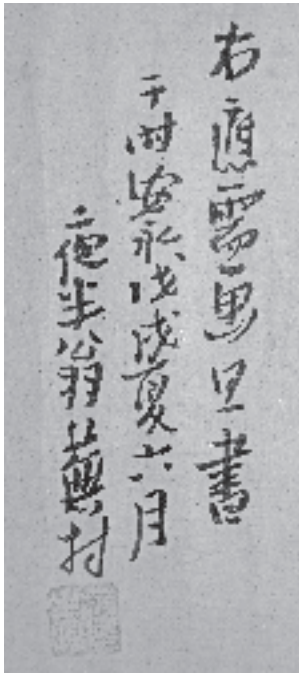
試みる。

一 作品概要

徳川本は、現在上下二巻の構成となっている。下巻の巻末に(挿図1)、「右應需画且書 于時安永戊戌夏六月 夜半翁蕪村(潑墨生痕「白文方印」)」とある。⁽³⁾

上巻は本紙縦二六・〇糎、長五九七・五糎、下巻は本紙縦二六・〇糎、長一二五八・五糎である。上下巻で容量に大きく差が出た状態となっており、製作当初の紙継とは異なる、後世に施されたとみられる紙継が随所に見受けられる。⁽⁴⁾ また、後に挙げる他の現存作品と比べ縦の寸法が短く、部分的に天地に数耗幅で雲母を塗布してある箇所があり、伝来の途中でなんらかの事情により、装丁が改められたと考えられる。更に、本文・挿絵の順序を見ると、錯簡が生じている。

『奥の細道』の旅程は、四十五行程に細かく分けられる。本文の始終をまとめると次のようになる。なお、本文は徳川本に拠ったが、徳川本には



挿図1 落款・印章 徳川本

錯簡が生じているため、本来の順序に並べ替えた上で引用した。

- 1 旅立…月日は百代の…面八句を菴の柱にかけ置
- 2 千住…弥生も末の七日…見送るなるへし
- 3 草加…ことし元禄二とせにや…煩となれるこそわりなけれ
- 4 室の八嶋…室の八嶋に詣す…世に傳ふ事も侍し
- 5 日光仏五左衛門…卅日光山の禁に…氣稟の清質尤尊ふへし
- 6 日光参拝…卯月朔日御山に詣拝す…滝にこもるや夏の初
- 7 那須…那須の黒羽…結付て馬を返しぬ
- 8 黒羽…黒羽の館代浄坊寺何かしの…夏山に足駄を拝む首途哉
- 9 雲巖寺…當國雲岸寺の奥に…一句を柱に残侍し
- 10 殺生石…遊行柳…是より殺生石に…植えて立去る柳かな
- 11 白河の関…こゝろもとなき日…関の晴着哉 曾良
- 12 須賀川…とかくして越行ま…に見付ぬ花や軒の栗
- 13 あさか山…等窮か宅を出て…福嶋にやとる
- 14 しのぶの里…あくれはしのふもち摺の…しのふ摺
- 15 佐藤庄司が旧跡…月の輪のわたしを…五月朔日の事也
- 16 飯塚…その夜飯塚にとまる…大城戸をこす
- 17 笠島…鐙摺白石を過…岩沼に宿る
- 18 武隈…武隈の松に…三月越し
- 19 宮城野…名取川を渡…草鞋の緒
- 20 壺碑…かの画図に…おつるはかりなり
- 21 末の松山…それより塹田の…殊勝に覚へらる
- 22 塩釜…早朝しほかまの…雄嶋の磯につく
- 23 松島…抑ことふりにたれと…寺はいつくにやとしたはる

24石の巻…十二日平和泉とところさし…廿余里ほと、おほゆ
 25平泉…三代の栄耀…さみたれの降のこしてや光堂
 26尿前の関…南部道はるかに胸と、ろくのみなり
 27尾花沢…尾花沢にて…古代のすかたかな 曾良
 28立石寺…山形領に立石寺と…しみ入るせみの聲
 29最上川…もかみ川のらんと…早し最上川
 30羽黒…六月三日羽黒山に登る…御山と謂つへし
 31酒田…羽黒を立て…いれたり最上川
 32象潟…江山水陸の風光…みさこの巢
 33越後路…酒田の余波…よこたふあまの河
 34市振…今日は親しらす…かたれば書と、め侍る
 35那古の浦…くろへ四十八か瀬…右は有磯海
 36金沢…卯の花山…つれなくも秋のかせ
 37小松…小松と云ところ…甲の下のきりくす
 38那谷…山中の温泉に…白しあきの風
 39山中…温泉に浴す…書付消ん笠の露
 40全昌寺…汐越の松…大聖寺の城外…指を立るかことし
 41天竜寺…永平寺…丸置天竜寺の…貴さゆへありとかや
 42等栽…福井は三里斗なれは…枝折とうかれ立つ
 43敦賀…漸白根か…北国日和定めなき
 44種の浜…十六日空霽たれは…筆とらせて寺にのこす
 45大垣…路通も此みなとまで…はかれ行秋ぞ

右記を参考に、錯簡の現状を記すと次のとおりとなる。

新出の与謝蕪村筆「奥の細道図巻」模本について

(上巻) 1旅立→2千住→3草加→4室の八嶋→5日光仏五左衛門→6
 日光参拝(「うらみの滝と申傳え侍るなり」まで)→11白河の関(「う
 の花をかさしに関の晴着哉 曾良」から)→12須賀川→13あさか山
 →14しのぶの里→15佐藤庄司が旧跡→16飯塚→17笠島→18武隈
 →19宮城野→20壺碑→21末の松山(本文のみ)

(下巻) 21末の松山(挿絵のみ)→22塩釜→23松島→24石の巻→25平泉
 (「千歳の記念とはなれり」まで)→6日光参拝(最後の句「暫時は滝
 にこもるや夏の初」から)→7那須→8黒羽→9雲巖寺→10殺生
 石・遊行柳→11白河の関(「にもと、め置れしとぞ」まで)→30羽黒
 (「八日月山にのほる」から)→31酒田→32象潟→33越後路→34市
 振→35那古の浦→36金沢→37小松(「縁記に見えたり」まで)→25
 平泉(「さみたれの降のこしてや光堂」から)→26尿前の関→27尾花
 沢→28立石寺→29最上川→30羽黒(「御山と謂つへし」まで)→37
 小松(「むさんやな甲の下のきりくす」から)→38那谷→39山中
 →40全昌寺・汐越の松→41天竜寺・永平寺→42等栽→43敦賀
 →44種の浜→45大垣

21末の松山では本文・挿絵を上下巻に分け、6日光参拝では本文の途中
 で明らかに句が続くべきである箇所を寸断するなど、鑑賞上妨げとなる錯
 簡が著しい。当初一卷だったのを二巻に分け、その際に錯簡が生じたのか、
 あるいは二巻だったのを修理した際に、錯簡が生じたのかは判然とし⁵⁾ない。
 挿絵は、全部で十三図あり、以下の場面を描く。

1旅立、7那須、12須賀川、15佐藤庄司が旧跡(図1)、20壺碑、21末
 の松山、22塩釜、26尿前の関、31酒田、34市振、39山中、40全昌寺、

42等裁(図3)

徳川本全体に、伝来途次に生じたカビが原因と思われる汚れがみられるため、状態は良好ではないが、淡墨・淡彩によって描かれている。

以上、徳川本について概観したところで、「奥の細道図」の現存作品との比較検討を行いたい。

二 諸本との比較検討——海杜本を中心に——

これまで紹介されてきた、現存する「奥の細道図」は、以下の五点である。

- ①「奥の細道図巻模本」
(兵庫・柿衛文庫蔵、以下これまでの慣例に従って「了川本」と略称する)
- ②「奥の細道図巻」
(広島・海の見える杜美術館蔵、以下「海杜本」と略称する)
- ③「奥の細道画巻」
(重要文化財、京都国立博物館蔵、以下「京博本」と略称する)
- ④「奥の細道図屏風」
(重要文化財、山形美術館蔵、以下「山形本」と略称する)
- ⑤「奥の細道図巻」
(重要文化財、大阪・逸翁美術館蔵、以下「逸翁本」と略称する)

①了川本は、「安永^(六年)丁酉^(一七七七)秋八月 応佐々木季遊子之需 書於平安城南夜半亭中 六十二翁謝蕪村」の奥書を有した蕪村筆「奥の細道図巻」を了川という人物が臨模した一巻である。模本ながら、本文・挿絵・奥書は蕪村の筆跡の余韻が認められ、原本の製作時期自体は、現存の蕪村筆「奥の細

道図」より遡る。挿絵は九図を数える。

②海杜本は、近年発見された一巻で、奥書に「右応北風来屯需画且書于時安永戊戌夏六月 夜半翁蕪村」とあり、現存する蕪村筆「奥の細道図」の最も製作時期が遡る、安永七年六月製作の作品として知られている。また、兵庫の豪商北風来屯の注文であることがわかる。挿絵は十三図を数える。法量は、縦三〇・三糎、長一八七二・〇糎。

③京博本は、上下二巻で伝わっており、下巻に「安永戊戌冬十一月写於平安城南夜半亭且畫 六十三翁蕪村」の奥書をもつ。挿絵は十四図を数える。法量は、上巻縦三二・〇糎、長九五五・〇糎 下巻縦三一・〇糎、長七一・〇糎。

④山形本は、従来確認されてきた「奥の細道図」のうち、唯一屏風に描かれた作品であり、その形態上の制約のためか、挿絵は九図と最も少ない。「安永^(八年)己亥^(一七七九)秋平安夜半亭蕪村寫」の落款をもつ。法量は、縦一三九・三糎、横三五〇糎。

⑤逸翁本は、奥書に「右奥細道上下三卷應維駒子之需寫於洛下夜半亭閑窓 于時安永己亥冬十月 六十四翁蕪村」とあり、現段階でもっとも製作が遅れる。また、黒柳維駒の注文であったとわかる。上下二巻に含まれる挿絵は最多の十五図を数え、蕪村における「奥の細道図」の集大成的作品として知られている。法量は、上巻縦二八・〇糎、長九二五・七糎、下巻縦二八・〇糎、長一〇九二・七糎。

以上のうち、蕪村の真筆とされる②⑤を、特に製作時期の近い②を比較検討の対象とし、以下に論じていくこととする。

(一) 本文の異同

蕪村の「奥の細道図」諸本における本文の典拠は明和七年(一七七〇)版の『奥の細道』、いわゆる「蝶夢本」であり、「奥の細道図」諸本に異同を含むことが、既に先行研究によって明らかとなっている。⁽⁷⁾ 藤田真一氏の考察をもとに以下、検討する。⁽⁸⁾

i 「奥の細道図」諸本に共通の異同

「奥の細道図」諸本には、蝶夢本と異なりつつも、皆同一の表記を取る箇所が確認できる。代表的な箇所をとりあげると、蝶夢本が40全昌寺・汐越の松の中で「大聖持の城外全昌寺」と表記するのに対して、「奥の細道図」諸本は「大聖寺の城外全昌寺」(傍線は筆者による)と記している。徳川本もこのような箇所に対しては同一の表記をとり、同様の箇所は他に六箇所確認できる。⁽⁹⁾

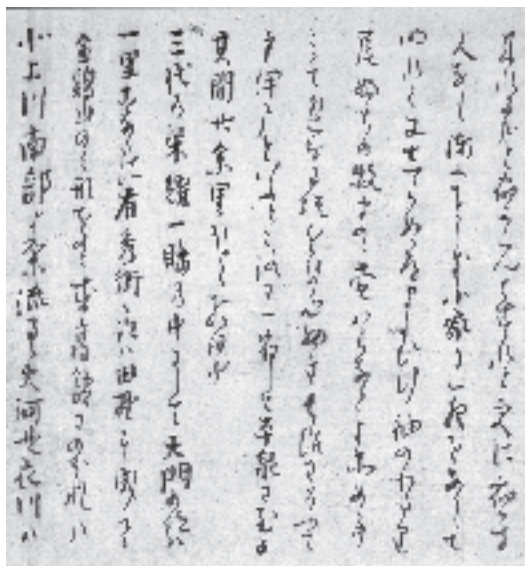
ii 海杜本と共通の異同

こうした異同の中で、製作時期の最も近い海杜本には、徳川本と強い近似性が確認できる。6日光参拝の中の「あら尊と青葉若葉の日の光」の一句は、海杜本と徳川本のみが「あら尊と」と表記するのに対し、京博本・山形本は「あなたうと」、逸翁本は「あらたうと」と表記している。このほか、海杜本と徳川本の近似性を示す共通の異同は四十箇所見出せる。⁽¹⁰⁾ これらのことから、徳川本は、海杜本と非常に近い本文内容をもっていることが確認される。

(二) 書体

では、こうした本文を記した書体についてはどうか。岡田彰子氏は、「奥の細道図」諸本における書体の書き分けを指摘している。⁽¹¹⁾ 徳川本と近似性

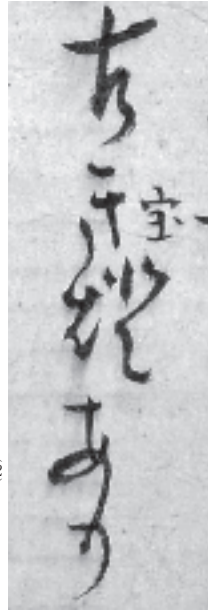
新出の与謝蕪村筆「奥の細道図巻」模本について



挿図3 25平泉 冒頭部分 徳川本



挿図2 25平泉 冒頭部分 海杜本



挿図5 22塩釜 部分
徳川本

の高い海杜本にも同様の指摘がなされている。⁽¹²⁾

海杜本と徳川本の書体を比べると、書体はおろか字形・字配りがほとんど一致する。25平泉の冒頭部分を例に比較してみると(挿図2・3)、「三代の栄耀」の行の前後で、細々とした書体から肥瘦に富んだやや太めの書体へと変化している様は同じである。更に、字形・字配りはほぼ同様であり、字の払いやはねなど細部まで見比べてようやく別の作品であるとわかる程である。

海杜本と徳川本の書体の書き分けという点には更に強い近似性が認められるが、細かな筆致を比べると、海杜本には一字の中に若干の筆遣いの変化を見出せるのに対して、徳川本は均質な筆遣いのままに字を書いていることがうかがえる。

さらに看過し難いのは、それがまるで敷き写しのようなことである。22塩釜「神前に古き宝燈あり」という箇所を、海杜本・徳川本は、「き」の横に小さく「宝」と記している(挿図4・5)。また、20壺碑「天平宝字

挿図4 22塩釜 部分
海杜本

六年」においても、「六」を同様に右下に小さく書き入れる点を共通させている。書き間違いのためと見られる書き入れにすら、同一の表記が看取されることは、何を意味するのか。

(三)挿 絵

挿絵においても、構図に海杜本と強い近似性が見出せる。⁽¹³⁾海杜本・徳川本ともに十三図を数え、描いている場面・構図も同一である。15佐藤庄司が旧跡の挿絵では、共に佐藤兄妹の妻女の像を描く。他の「奥の細道図」諸本が二体の女武者像を向かい合わせて描くのみであるのに対して、海杜本・徳川本は、二体とも画面左方向に向かせ、更に上部に独自の注記を加えている。また、20壺碑の挿絵では、海杜本・徳川本のみ、碑の上部に刻まれる「西」の文字が記されていない。このように構図については徹底して一致している。

では、描法についてはどうかであろうか。海杜本が状態を良好に保っているのに比べ、徳川本の状態が不良であり、彩色の比較を行なうことは難しいため、筆致に限って検討すると、やや徳川本に粗放さが認められる。15佐藤庄司が旧跡の挿絵を見比べると(図1・2)、ともに、左の武者像の甲冑の胴を彫塗で鹿の子文様のように描いているが微細な違いも見られる。海杜本は丸く塗り残しを作りながら水色の絵の具を面塗りし、残った丸のなかに点をおいているのに対して、徳川本は七宝文を描くかのように、線描によって文様を描いている。また、脚部の描線などを比較してみると、海杜本が本文の書体のようにおおらかで肥瘦のある線を用いているのに対して、徳川本は全体的に細くなりがちで、筆鋒の粗さが目立っている。

こうした筆致の特徴は他の場面にも確認できる。42等栽の挿絵では、海

杜本(図3)には老女がゆるやかな丸みを帯びた描線で描かれる一方で、徳川本(図4)には同様の柔和な描線はみられず、たどたどしい表現となっている。また、建屋の軒先を描くのに淡彩に筆先が割れ、やや擦筆気味な筆致で淡墨を重ね、脇の小屋の窓や屋根の一部には濃墨を用いる等、異なる筆致を使い分け、画面に奥行きをもたらしている。一方、徳川本にはそうした筆致の多様性はいくつかがない。

更に、先の書体の検討において見出された敷き写しのような箇所が42等裁には確認できる。画面右の芭蕉の上部に描かれる、建屋にかかる葉叢にみられる「へ」の字型の枝である。本来、樹木の枝などは、樹木が構図上大きな役割を果たさない限り、定型を採ることは稀だが、海杜本と徳川本には、定型の表現が採られていることとなる。

これらのことから、構図はほとんど一致するものの、描法には隔たりが確認できた。更に、書体同様に敷き写しとみられる筆致も確認できた。

徳川本は、本文の異同、書体の書分けや挿絵の構図には、製作時期の近い海杜本と非常に近接した内容をもっているが、その近似性はあまりに強く、むしろ敷き写しや写し崩れとも見られる箇所が散見された。徳川本は海杜本の精密な模本と考えるのが妥当であろう。

結 語 —— 「奥の細道図」の中で ——

安永年間には、十点余りの「奥の細道図」が製作されたことが蕪村の書簡からわかっている。⁽¹⁴⁾ 其中で、蕪村が非常に興味深いことを述べている次の書簡がある。⁽¹⁵⁾

新出の与謝蕪村筆「奥の細道図巻」模本について

安永七年(二七七八)十月十一日付 晝台・士朗宛
一、おくの細道之巻 書画共愚老揮毫仕候物 近々相下可申候 御覽可被下候 是れは両三本もした、め候而のこし置申度所願候 貴境は文華の土地に候故一本はのこし申度候 併紙筆の費も有之候故 宰馬子などの財主之風流家にとゞめ申度候

右には、奥の細道図巻を三点も製作したとある。その内の一点は、書簡のあて先である尾張の俳人加藤晝台(一七三二―九二)に留め置くことを希望しているが、残りの二巻については、当時の富裕者に購入されることを願っている。注文製作のみならず、こうした作り置きを生んだ製作態度は、蕪村の「奥の細道図」製作における熱狂を物語る。

海杜本の精密な模本である徳川本が生まれた事情には、このような蕪村の「奥の細道図」が大量に生産され人口に膾炙したことが背景にあると考えられる。

註

(1) 徳川本は、坂田宏・太田美和子両氏の祖父である故坂田武雄氏(一八八八―一九八四)が蒐集した作品であった。坂田氏は、昭和十七年に坂田種苗を設立し、美術品を愛好していたことで知られている。現在、コレクションの一部が横浜美術館に寄贈されている。

(2) 岡田彰子「蕪村筆「奥の細道画巻」について」(『サピエンチア 英知大学論叢』第二十二号 聖トマス大学 昭和六十三年二月二十九日)ほか。

(3) 箱蓋裏には、左記のとおり、鎌倉芳太郎氏による極札がある。
此の繪巻物下巻の末に

右應需畫且書

于時安永戊戌夏六月

夜半翁蕪村□

と記せる款署あり安永の戊戌は其の七年に當れり長尾鉄彌氏蔵
重要美術品紙本著色奥の細道図繪巻物二巻は安永七年十一月の作なり又橋
本辰二郎氏舊蔵重要美術品紙本著色奥の細道図屏風には安永八年秋の年記
あり蕪村の書簡によれば安永二年以前既二此の図巻二種を畫きたる由なれ
ども今に傳はらず現存するは右の三種のみにして此の繪巻はその最も早き
ものなり蕪村畫蹟中屈指のものとして珍重するに足る所以なり

鎌倉芳太郎識

(4) なお、製作当初と見られる紙継は、本紙の表面に施された具引きのため、全
てを確認し難い。このため、一紙ごとの寸法は計測し難い状況となっている。

(5) 左記のとおり、箱蓋裏に大倉好斎とみられる極があるが、印章からは、大倉
好斎の極とは断じ難い。

夜半亭蕪村紙地絵巻物

有名印二卷致一覽候処

正筆相違無御座候以上

(「好斎」黒文円印)

嘉永四 大倉法橋花押

重陽 (「及水」黒文方印)

(6) 初めて紹介したのは、『思文閣古書資料目録 善本特集』(第十四輯 思文閣
出版 平成十四年七月)である。更に、河野元昭「與謝蕪村筆 奥の細道圖巻」(「國

華』第一三四五號 國華社 平成十九年十一月二十日)で紹介された。

(7) 岡田利兵衛『俳画の美』豊書房 昭和四十八年四月。

(8) 藤田真一「蕪村筆「奥の細道図」本文対照一覽」(「大阪俳文学研究会会報」
第三十八号 大阪俳文学研究会 平成十六年十月)。

(9) 「本文対照表」のうち、8・12・16・17・24・41・42が該当する。

(10) 「本文対照表」のうち、1・7・9・11・13・15・18・19・20・23・25・
40・43・48が該当する。

(11) 註(2)前掲論文参照。

(12) 岡田彰子『与謝蕪村筆 奥の細道画卷 別冊解説』思文閣出版 平成十四年
十一月一日。

(13) 奥の細道図諸本の挿絵については、藤田真一「蕪村余響―そののちいまだ年
くれず」(岩波書店 平成二十三年二月二十二日)が全体を考察している。

(14) 註(2)前掲論文参照。

(15) 大谷篤蔵・藤田真一校注『蕪村書簡集』岩波書店 平成四年九月十六日。

【付記】 本稿を執筆するにあたり、藤田真一氏(関西大学教授、岡田秀之氏(MIHO
MUSEUM学芸員)、佐々木丞平氏(京都国立博物館館長)に貴重な御教示を賜り
ました。また、海の見える杜美術館より画像の提供と掲載のご許可を賜りまし
た。記して深謝いたします。(美術館 学芸員)

〔資料〕本文対照表

凡例…本表は、徳川本・「奥の細道図」諸本と「蝶夢本」の本文を比較した異同のうち、徳川本・「奥の細道図」諸本が同一の表記をとる箇所、および海杜本と徳川本の共通性が確認できる箇所の抄録である。
現状では、本作品に錯簡が生じているが、本来通りの順序に改めた。
蝶夢本と異なる表記をとる箇所には、適宜傍線を附した。

	異同箇所及び蝶夢本文	海杜本	徳川本	京博本	山形本	逸翁本
1	〔4室の八嶋〕 あるしの云けるやう	あるし云けるやう	同上	あるしの云けるやう	同上	同上
2	〔6日光参拝〕 あら尊と青葉若葉の日の光	あら尊と	同上	あなたうと	同上	あなたうと
3	〔6日光参拝〕 仍て墨髮山の句有	仍て墨髮山の句有	同上	仍て黒髮山の句有	同上	同上
4	〔6日光参拝〕 軒をならへて予か薪水の労を	軒をならへ予か	同上	軒をならへて予か	同上	同上
5	〔7那須〕 名のやさしかりければ	やさしかりければ	同上	やさしければ	同上	同上
6	〔8黒羽〕 与市扇の的を射し時別しては	時別しては	同上	時別して	同上	同上
7	〔9雲巖寺〕 佛頂和尚山居跡あり	山居跡あり	同上	山居の跡あり	山居跡あり	山居の跡あり
8	〔9雲巖寺〕 橋をわたつて山門に入る	文橋をわたりて	同上	同上	同上	同上
9	〔10殺生石・遊行柳〕 真砂の色の見えぬほと	真砂の色の見えぬ	同上	同上	真砂の見えぬ	真砂の色の見えぬ
10	〔10殺生石・遊行柳〕 此所の郡守戸部某	此所の郡主戸部某	同上	同上	同上	此所の郡守戸部某
11	〔10殺生石・遊行柳〕 折くへの給ひ聞え給ふを	折くへの給ひ	同上	同上	折くへの給ひ	同上
12	〔10殺生石・遊行柳〕 柳のかけにこそ立より侍つれ	立より侍れ	同上	同上	同上	同上
13	〔12須賀川〕 かくやと間に覺られて	間に覺られて	同上	間に覺えられて	間に覺れて	間に覺えられて

14	〔13あさか山〕 人々に尋侍れとも	同上	人々に尋侍れとも	同上	人々に尋侍れとも
15	〔13あさか山〕 沼を尋人にとひ	同上	沼を尋人にとひて	同上	同上
16	〔15佐藤庄司が旧跡〕 左の山際一里半計に有	同上	左の山際一里斗に有	同上	同上
17	〔15佐藤庄司が旧跡〕 墜涙の石碑も遠きにあらす	同上	墜涙の石碑も	同上	同上
18	〔16飯塚〕 明れは又旅立ちぬ	同上	明れは旅立ちぬ	同上	同上
19	〔16飯塚〕 鐙摺白石の城を	同上	鐙摺白石を	同上	同上
20	〔19宮城野〕 岡はあをひ咲比也	同上	岡はあふひ咲比也	同上	同上
21	〔19宮城野〕 今も年々十符の菅菰を調て國守に 献す	同上	今も年々十符の菅菰を 調て國主に献す	同上	今も十符の菅こもを調 て國守に献す
22	〔20壺碑〕 按察使鎮守符將軍大野朝臣東人之 所里也	同上	按察使鎮守府將軍大野 朝臣東人之所里也	同上	按察使兼鎮守府將軍大 野朝臣東人之所置也
23	〔21末の松山〕 玉川沖の石を尋ぬ	同上	玉川沖の石をたつね	同上	同上
24	〔22塩釜〕 文治三年和泉三郎奇進	同上	文治三年和泉三郎奇進	同上	同上
25	〔23松島〕 た、ふ嶋くの数	同上	た、ふ嶋く数	同上	た、ふ嶋の数くを
26	〔23松島〕 旅寝するこそあやしきまで	同上	旅寝するとは	同上	同上
27	〔23松島〕 こよひの友とす且杉風濁子か	同上	友とす杉風濁子か	同上	同上
28	〔23松島〕 成就の大伽藍とはなれりける	同上	成就の大伽藍とはなれ りけり	同上	成就の大伽藍とはなれ りける

29	〔24石巻〕 つとひ人家地をあらそひて	同上	つとひ人家地をあらそひて	つとひ人家地をあらそひて
30	〔26尿前の関〕 よろこひてわかれぬ跡に聞てさへ胸と、ろくのみ也	同上	よろこひてわかれぬ跡に聞てさへ胸と、ろくのみ也	よろこひてわかれぬ跡に聞てさへ胸と、ろくのみ也
31	〔27尾花沢〕 日比と、めて長途のいたはりさま／＼にもてなし侍る	同上	同上	日／＼と、めて長途のいたはりさま／＼にもてなし侍る
32	〔29最上川〕 爰に古き俳諧の種	同上	こゝに古き俳諧の種	こゝに古き俳諧の種
33	〔30羽黒〕 三山順礼の句を短冊に書	同上	三山巡礼の句を短冊に書	三山順礼の句を短冊に書
34	〔32象潟〕 雨後の晴色又頼も敷と	同上	同上	雨後の晴色又たのもしと
35	〔32象潟〕 神功后宮の御墓	同上	同上	神功皇后の御墓
36	〔34市振〕 云捨て、出つあはれさしはらく止まさりけらし	同上	云捨て、出つあはれさしはらく止まさりけらし	云すて、出つあはれさしはらく止まさりけらし
37	〔36金沢〕 それが旅宿をとにもす	同上	それが旅宿をとにもす	それが旅宿をとにもす
38	〔38那谷〕 那谷と名付給ふとかや	同上	那谷と名付給ふとかや	那谷と名付給ふとかや
39	〔39山中〕 爰に來りし比風雅に	同上	こゝに來りし比風雅に	こゝに來りし比風雅に
40	〔39山中〕 貞徳の門人となつて	同上	貞徳の門人と成て	貞徳の門人となりて
41	〔40全昌寺・汐越の松〕 大聖持の城外全昌寺	同上	同上	同上
42	〔40全昌寺・汐越の松〕 庭掃て出はや寺に散柳	同上	同上	同上
43	〔40全昌寺・汐越の松〕 一辨を加ふものは	同上	一辨を加ふものは	同上

44	「41天竜寺・永平寺」 邦機千里を避てかゝる山陰に	邦機千里を避てかゝる山陰に	同上	ほうき千里を避てかゝる山陰に	邦機千里を避て山陰に	邦機千里を避てかゝる山陰に
45	「43敦賀」 土石を荷ひ泥濘を	土石を荷ひ泥濘を	同上	土石を荷ひ泥濘を	同上	土石を荷ひ泥濘を
46	「44種の浜」 時のまに吹着ぬ濱はわつかなる海士の小家にて	時のまに吹着ぬ濱はわつかなる海士の小屋にて	同上	時のまに吹着ぬ濱はわつかなる海士の小家にて	時のまに吹着ぬ濱はわつかなる海士の小家にて	時のまに吹着ぬ濱はわつかなる海士の小家にて
47	「44種の浜」 等裁に筆をとらせて	等裁に筆をとらせて	同上	等裁に筆をとらせて	等裁に筆をとらせて	同上
48	「45大垣」 露通も此みなどまで	路通も此みなどまで	同上	露通も此みなどまで	路通も此みなどまで	同上

金 鯨 叢 書 第四十二輯 [年一回刊行]
— 史学美術史論文集 —

平成二十七年 三月 三十日 編集
平成二十七年 三月 三十日 印刷・発行

編集者 竹 内 義 誠
〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会

発行者 電話(3950)〇一一番(代)
〒171-0031 東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所

電話(3950)〇一一番(代)
〒461-0023 名古屋市中東区徳川町一〇一七
徳川美術館

電話(935)六二六番(代)
〒605-0089 京都市東山区元町三五五
株式会社 思文閣出版

電話(751)一七八番(代)
〒600-8805 京都市下京区中堂寺鍵田町二
株式会社 印刷 同朋舎

印刷所 電話(361)九一二番(代)